

『新青森市史 通史編第二巻 近世』

岡崎 寛徳

近世の青森市域を概観かつ詳述した『新青森市史』通史編の第二巻が刊行された。七〇〇頁を超える大部なもので、概説というよりも、研究論文集に近い印象を持った。

第一章 藩政の確立と青森

第二章 藩政の展開と青森

第三章 九浦制度と交通・流通

第四章 幕末・維新期の青森

第五章 近世青森の信仰と社会

第六章 近世青森の人々と暮らし

第七章 絵画資料などを通してみた近世の青森

右の通り七つの章で構成され、執筆者は十四人を数える（以下、各節括弧内に記載）。

まず【第一章】の「第一節 青森湊の成立と青森町の整備」（長谷川成一氏）では、青森という湊と町の形成過程を検討する。弘前藩（以下、藩）は、中世以来の湊である油川ではなく、青森湾沿岸部を湊として選択し、機能を油川から青森へと移すべく入船集中を図った。また、当時から米穀が松前・蝦夷地などへの移出品として重要であった。

「第二節 松前・蝦夷地と青森町」（市毛幹幸氏）は、まず寛文蝦夷蜂起を取り上げる。鎮庄の一端を担った藩は、津軽アイヌを支配下に組

み込む。寛文十一年には御飯屋が青森町に建設され、青森は松前・蝦夷地への渡航地として政治的・軍事的・経済的に重視された。津軽米の移出だけではなく、人々の往来も多く、次第に青森商人が台頭していった。

「第三節 村落の成立と検地」（浪川健治氏）では、渡り商人の集住化や、村落における開発と検地の実施を述べている。また、油川村や青森町の天和「書上帳」を分析する。

「第四節 青森町における漁業と漁民」（坂本壽夫氏）は、漁師頭の活動と衰退過程を述べる。鰯や鮭は献上用となり、煎海鼠は夏の贈答品として広く用いられた。漁場にあつては争論が起きることもあり、苦境の中を生き抜く漁民の姿が見られる。

【第二章】「第一節 都市青森と青森町人」（脇野博氏）は、青森町を人々が流入・流出する「外に開かれた都市空間」と評価する。青森湊は藩の貿易港としての性格が強く、商業が活発化していった。

「第二節 蝦夷地警備と青森町」（市毛幹幸氏）は、青森町を交易の窓口とする。松前・蝦夷地へは米・タバコ、松前からはニシンなどが運ばれ、松前商人も青森町で活動していた。藩は規制を強化するが、領民の渡海は止まなかった。また、藩にとつて青森町は「北方情報の集積センター」ともなり、ロシア接近に伴い沿岸警備が強化された。

「第三節 油川村の生産環境」（浪川健治氏）は、村絵図などから油川が農業・水産業だけではなく商業も行われていたことを明らかにする。海岸沿いに位置し、羽州街道が通る油川は地理的優位があり、「交通の結節点」と評価する。

「第四節 山林の利用と牧」（脇野博氏）は、前節までの沿岸地域で

はなく、林野地域に目を向ける。檜などの材木は重要な収入源でもあり、初期の無秩序な伐採のため枯渇してしまうが、のちに山林保護が進められた。また、牧では馬の飼育が行われていた。

【第三章】は流通や交通に関わるもので、「第一節 九浦制度と油川湊」（脇野博氏）は、九浦制度によって藩がさまざまな規制を行ったが、抜荷などにより機能不全となり、解体していったことを述べる。そうした中でも、青森湊は最大の湊となり、拠点の役割を果たしていた。

「第二節 全国海運と地域海運」（浪川健治氏）は、青森湊の位置づけを明らかにする。青森湊からの江戸廻米は江戸藩邸で消費され、江戸の発展に伴い廻米量も増加していく。一方、青森湊は「地域的な海運の結節点」という性格も持ち合わせていた。しかし、米価安諸色高によって動揺し、また箱館開港の影響も多分に受けていた。

「第三節 青森を行き交う人と物」（中野渡一耕氏）は、青森を「海運の拠点」、街道が「交差する要衝」とする。特に近世後期には交通量が増大した。蝦夷地へ向かう人々が増加したためである。同時に、町の負担も増えることとなった。また、青森町の有力商人の家が本陣となり、松前藩主・弘前藩主や幕府巡見使の宿泊に対応した。

「第四節 関所の機能と野内町」（小石川透氏）は、関所での出入統制を検討する。人の出入とともに、物資の出入についても統制を図っていた。蝦夷地へ行く人が増加すると、統制も改訂されていく。また、関所は「情報収集などの役割」も担っていた。

【第四章】は幕末・維新期の社会状況を描く。「第一節 箱館開港と青森町」（山下須美礼氏）は、対外状況の急激な変化の対応について考

察する。箱館開港に伴い、青森湊は重要性を増し、さまざまな船が来航する。そうした「混乱と負担」の一方で、「文化的・技術的な刺激がいち早くもたらされる場所」でもあった。また、箱館奉行所では米穀などの物資が大量に必要となり、それを支えたのが青森であった。

「第二節 幕末の青森と民衆運動」（浪川健治氏）は、松前・蝦夷地への渡海者を追う。「松前拵」には女性の姿も見られた。また、青森町へも他領者が多く流入しており、「労働力の移動の連鎖こそが、青森を極とした新たな地域関係を作り出していた」と結ぶ。

「第三節 箱館戦争と青森町」（山邊菜穂子氏）は箱館戦争期の青森の様子を明らかにする。旧幕府勢力に敗れた箱館府らの官軍、箱館を奪い返すための官軍、戦争の怪我人や降伏人と、多くの人々が次々に青森へ集まった。その度に青森の人々は大きな負担を強いられ、商人は多大な御用金が賦課された。心情を吐露する伊東彦太郎の日記は興味深い。

「第四節 維新期の青森」（山邊菜穂子氏）は、藩主導によって設立された青森商社を取り上げる。領内外の産物を集積し、蝦夷地での需要に応じたが、赤字経営に加えて商人間が対立し、藩の解体に伴い商社も消滅した。さらに、旧藩士のために消費者から生産者へ転換する帰田法が実施されたが、土地を転売してしまう者も多く失敗に終わっている。

【第五章】の「第一節 青森の寺社と信仰」（白石睦弥氏・葛谷大輔氏）は、青森の寺社や修験道を紹介する。幕末には世情を反映するかのようには民間宗教者が多くあらわれ、明治初年には神仏分離の影響を受けていた。

「第二節 青森の学芸と教育」（福井敏隆氏）は、経済的交流の広ま

りにより「商都」青森も学芸面の影響を受けたとし、青森の俳人を取り上げる。また、寺子屋における庶民教育に着目し、町役人・村役人の他、藩士なども寺子屋を開いていたことが明らかとなる。

「第三節 温泉と村落」（長谷川成一氏）は浅虫村について。浅虫は出湯が豊富で、藩主休息所も設置された。菅江真澄や古川古松軒、渋江長伯の浅虫来訪記事を紹介する。

「第四節 災害と民衆」（白石睦弥氏）では、まず青森が度々風水害に見舞われたことを述べる。堤川が氾濫することもあり、大火も度々起きていた。人々はそれから避難、復興に取り組んだ。藩による御救、富裕商人による施行も見ることができ。

【第六章】「第一節 町場の暮らし」（脇野博氏）は、人々の欠落や娯楽、そして青森騒動を取り上げる。寒気による大凶作から米不足となり、商人による買い占めから打ちこわしが発生した。それは無秩序なものではなく、飯米確保を目的とした惣町一揆であった。

「第二節 村の暮らし」（浪川健治氏）は、根井村と小館村の「面改帳」を分析する。前者は沿岸部、後者は内陸部に位置し、それぞれの家族・田畑・生業などが判明する。身分が明記されていない者や、「養弟」などの擬制的家族にも着目している。

最後の【第七章】「第一節 絵図にみる青森（工藤大輔氏）」は、青森の町づくりプロセスを三段階に分ける。まず中央部の町づくりが進められ、次に職人町が形成され、そして新しい町が形成されていく。また、善知鳥集落の再検討を提言し、「青森町絵図」の年代検討を行い、さらに「天和書上絵図」焼失や謄写作業の経緯も明らかにする。

「第二節 絵画・紀行文にみる青森」（石山晃子氏）は、江戸時代における青森のガイドマップを紹介する。著名な菅江真澄の青森来遊記録だけではなく、江戸落語家船遊亭扇橋の「奥の枝折」、一瓢舎半升の「御国巡覧滑稽盡戯」などについても詳述する。

さて、本書を読み通すのに、筆者は多くの時間を要した。それは頁数だけが理由ではない。筆者が青森に精通していないことが影響している。本書は市民のためのものであるから特段必要はないのかもしれないが、冒頭に簡易な地図を付し、そこで主要街道と油川・浅虫・根井・小館などの位置がわかれば市外・県外の者にも理解しやすくなるだろう。

また、本書全体を通じて残念に思うのは、表の文字が極小であることと、史料図版に不鮮明なものが多数あること、この二点である。図表は文章の理解を進めたり、文章がなくなると一覽して理解できるためのものであるが、逆効果となっている箇所も見受けられる。

加えて、構成上のことになるが、第一・二・四章が通史的で、第三・五・六・七章は各論的な内容となっている（「まえがき」で「特論的に論じた」ところもあるとの断り書きがある）。「通史」なので、古い時代から新しい時代へという順序で青森の歴史が理解できていくだろうという思いで読み進めると、途中で古い時代に遡ることが度々ある。同じ内容を既読した思いも生じる。

しかし、単なる概説ではないところに本書の特徴がある。各章いずれも読み応えがあり、それぞれに踏み込んだ考察を行っている。執筆者の個性が効果的にあらわれており、研究論文集のごとくである。そして、

本書を通じて、青森は活動的な湊・町であり、松前・蝦夷地を取り巻く環境変化の影響を強烈に受けたダイナミックな地域であったと、筆者は心に刻んだ。

近世青森研究の新たな指標となる一冊であろう。先に刊行された資料編も随所に有効活用されている。その資料編を手に取りながら、また地図も手にして、じっくりと読み進めていくことをお勧めしたい。

(A5判、七二六頁、二〇一二年三月、青森市史編集委員会、

五九九五円)

(おかざき・ひろのり 大倉精神文化研究所)

『青森県史 資料編 中世3 北奥関係資料』

遠藤ゆり子

本書は、『青森県史 資料編』中世編のうち、南部氏関係資料(中世1)、安藤氏・津軽氏関係資料(中世2)に続く、第三冊目の巻である。次に、本書の目次を示した上で、内容を紹介していきたい。

第I部 南部・安藤・津軽・浪岡北畠・松前氏関係資料補遺

一 南部氏関係資料補遺／二 安藤氏関係資料補遺／三 津軽・浪岡北畠氏関係資料補遺／四 松前氏関係資料／五 熊野那智大社文書補遺／六 解題

第II部 諸家資料

一 鎌倉時代家わけ文書／二 南北朝時代家わけ文書／三 室町・戦国時代家わけ文書／四 解題

第III部 日記・記録・法令関係資料

一 幕府法令関係資料／二 鎌倉・南北朝時代日記・記録／三室町・戦国時代日記・記録／四 吾妻鏡／五 太平記／六 津軽一統志(首巻・附巻)／七 永禄日記／八 有職書・儀式書・往来物／九 解題

第IV部 宗教関係資料

一 寺社資料／二 高野山関係資料／三 津軽領内延宝・元禄寺社縁起書上／四 解題

第I部は、中世1・2の補遺資料と、新たに加えられた松前氏関係資